

束子の約束の飯
子尋田多



多田尋子
仮の約束

講談社

仮の約束

一九九四年六月一〇日 第一刷発行

著者——多田尋子

© Hiroko Tada 1994, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三三二 郵便番号一三〇二

電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——島田製本株式会社

定価はカバーに表示してあります

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

多田尋子略歴

一九三二年長崎県に生れる。日本女子大学

国文科を卒業。著書に

「単身者たち」「裔の子」

「臆病な成就」(いずれ

も福武書店刊)「体温」

(「秘密」(講談社刊)

目次

巣ごもり

5

そんな関係

71

仮の約束

151

あとがき

258

裝幀
望月
通陽

多田尋子作品集

飯の約束

巣ごもり

一

秋の学園祭が終った。

大抵のサークルでは三年生が主になって催しをし、四年生は当日参加するぐらいだ。彼らは就職運動と卒論とで、もうサークル活動はできなくなっている。

スライドや展示物を古代史研究会の部屋へ運んで後片づけをすませたあと、記枝^{きえ}たちは二年生が準備した打ちあげコンパの会場に出かけた。

来年の学園祭は二年生たちが主になってやるので、今年の催しが終ったこの打ちあげコンパからもう彼ら二年が主導権を持つ。彼らに案内された席に記枝たちは坐った。記枝は三年というだけで、大した役割もはたしていない部員だった。三年生の席の端に坐り、次々立って話している人間たちを見ていた。

気がつくとな隣に、記枝が入部したときの部長だった河野がいた。一年のとき、地方から上京して入学したばかりの記枝には大層えらく立派に見えた彼だった。一年生と四年生とでは三つしかちがわないのに、とてもそんなものではなかった。四年生の部長は名目だけで、実際に責任をとるのは三年生の副部長だが、やはり部員は部長を尊敬する。彼の横顔を、記枝はさとられないように眺めた。以前と同じようにきちんと刈込んで細い首だった。この清潔そうな感じが最初から好きだったんだとなつかしかった。サークルにはいつてすぐ、記枝は彼をすてきな人だと思った。しかし彼にაცოგაれてゐる女子部員は多かったから、そしてそのほとんどの記枝より魅力のある先輩たちだったから、遺跡をめぐる旅行のときでも新米の記枝は遠くから眺めているしかなかった。何人かの女子部員との噂も、そうなのかと聞いていた。直接口をきく折もないまま彼は卒業してしまったのだが、それからもほかの先輩と同じようにときどき部室へ顔を出す。土曜も日曜もないほどいそがしい官庁に就職したらしいのだが、たまには暇なときもあるのだそうだ。しかしそのあいだも、目があったり口をきいたりしたことはなかった。

コンパは騒がしくなっている。ほとんど立ちあがって、一斉に拍手したり、ごくろうさんごくろうさん、といいあったり、何人かで喧嘩でもしているように組みついたり足をかけてひっくり返したりしている。誰も聞いていない隅で、両手を振りまわして未練がましく説教をたれている、もう卒業の四年生がいる。

そういうなかで河野は黙って坐っている。ときどき、「ああ、河野さん」といってビールをつ

いでしばらく話していくものもいるが、いなくなっても彼はそのまま坐っている。小さなスナックを借りきったせまい会場でまわりが立って動いているから、河野とその隣の記枝は暗い穴に落込んでいるようだ。二人は何となく話をしはじめた。彼が部長のとき記枝が一年だったこと、一度も声をかけられたことがなかったこと、記枝の方はよく知っていたこと。記枝が一人で話す感じだった。場がもたないから無理して話すことを考えては少し話し、それに河野が、そうだったんですか、へーえ、そうですかと返事をしているという具合だった。大勢の人間の尻のあたりで、暗い穴のなかの二人きりの時間だった。耳に口を近づけなければ聞えないので、二人は首をのばすようにして近づけていた。何度か卒業生仲間や四年生たちに河野は見つかり、両腕をかかえるようにして連れて行かれるが、しばらくすると一人でひよろひよろとどってきて、前のとおり暗い穴に一人で坐っている記枝を見つけては安心したように坐った。彼もこの穴倉が気に入っているのだろう。大分酔ったらしいいかたで、大勢の人間の隙間にこそ孤独があるとふざけながら、記枝の飲みものをついでに持ってきてくれる。コンパが終るまで、彼は記枝だけのものという気がした。

コンパが終ったとき、河野は首をたれて眠っていた。記枝は起したがうまく歩けないようだった。彼女は決心して彼の腕の下に肩をいれた。彼女も頭がはっきりしないほどいつの間にか酔っていた。

「吉村さん、大丈夫ですか」

幹事の二年生が寄ってきた。

「その辺で、タクシーに乗せます」

「じゃ、河野先輩をおねがいます」

そういわれながら、あれ、彼の行きさを聞いていないのだと思った。

通りへ出て、車をさがした。とまったタクシーに彼を乗せたが、記枝が乗らないのを見て、いやいやぼくもといつて彼は降りてきた。タクシーは行ってしまった。彼は、ぼくは帰らないなどとぶつぶついいながら記枝の肩に手をかけ、右によろけ左によろけしながら駅と反対の方に向って歩きだした。

長いあいだあこがれていた彼だった。肩を組んで体をぶっつけるようにして歩いているのがたのしかった。このままずっと離れたくない、ここで離れてしまったらもう二度と会えないかもしれないと思つていふうちに、暗い道がいくらかあかるくなった。両側にホテルのネオンが並んでいる。肩にまわされていた河野の腕に力が入り、

「ね？」

といった。

「きみのような子がいたなんて、全然気がつかなかった」

翌朝彼は、腕のなかの記枝にそういった。

「わたし、目だちませんから」

「順序があべこべになったけど」

と彼はゆっくり目を窓へ向けた。

「ぼくはきみみたいな人をさがしていたような気がするなあ。目だたない人を。だけどそういう人は目だたないから見つけにくい。でもどこかに必ずいるんだろうと思っていたんだ。ほんとうに出会えてよかった」

そういつてから、記枝の両方の瞼に唇をつけた。

「それにしても、その貴重なチャンスをよくも逃さずに。ぼくのように何をやってもうまくいかない男が。われながら上出来だ」

昨夜会ったばかりなのに、そんなにはっきりいっていいのかと記枝は思った。しかしそれでもいい。記枝にとってははじめて会った男ではないのだから。こうやって一夜をあかしたことがうれしくてしかたがなかった。ようやく彼を自分のものにできたと思った。彼女は手をのばして、白い彼の胸をなでた。きれいだなあと見とれていた。腕や足には毛があまりないのに、白い胸に少しばかりの胸毛があった。彼女はそれを軽く引張った。

「痛い？」

顎を引いて見下ろすようにしている彼がゆっくりうなずいた。目が笑っている。記枝は急に恥かしくなって俯せになり、彼の白い腕に顔をこすりつけた。

「わたしはずーっと前から、サークルにはいったときから」

と、顔を横向きにして彼を見た。うれしいからじっとしていられない。体はずませてベッドのスプリングを動かしながら笑った。

「困りませんか？」

「何が？」

「後悔してませんか？」

彼女のいった言葉の意味がよくわからないように少しのあいだ真顔になってまばたきをしていた彼は、あらためて強く記枝を抱込んだ。

「それはぼくがいろいろと思っていた言葉だ。きみは？　きみはどうなの？」

こんどは彼の胸に顔をこすりつけた。

「きみはかわった子だなあ」

「そうでしょう？　河野さんはわたしのことも何も知らないでしょう？　困らないんですか」

「これから少しずつ教えてもらおう」

「そしてきらいになるんだ、きっと」

「そんなことはない。これからどんどん好きになる」

「いまはまだ好きではない」

「いや、いまも好きだけど」

「じゃ、少くとも昨夜は好きでもきらいでもなかった」

うーん、と考えるような声を彼は出した。

「わたしは、うれしい、です」

相手の耳に口をつけて、記枝は内緒話のときのような声でいった。

「よかった。大事にしようね、このこと」

はい、といいながら、記枝はもう一度しっかり抱きしめてほしいと思った。しかし彼は静かに体を起した。

「ずっとこのままいたいけど、時間だ。月曜日ですからね、ぼくは働きに行かなければならない」

つまらない、と記枝は、半身を起している彼の腰に腕をまわした。

「今日、仕事が終わったら」

彼は会う場所と時間を、考えながらいった。

「だから、ね、いい子だから」

服を着た彼は、ベッドの彼女を軽く叩いた。

「もうひと眠りしていきなさい」

彼は両掌に彼女の顔をはさんだ。

ひとり残るのは心細かったが、体がだるくて起きる気がしなかった。昨夜、彼にはわからないうように使ったハンカチに似た色を思った。はじめてだということを彼に知られたくなかった。そういうことで彼に負担をかけたくない。彼の場合、偶然のなりゆきでこうなったはずだった。コンパで隣りあって話しているときから、彼女のうれしさは彼に伝わっていただろう。肩にまわされた彼の腕をしっかりとぎって、夜の道を歩いているあいだ離さなかった。そういう相手をふりきらずに一緒に泊ってくれたのは、愛情ではなくやさしさだったのかもしれない。

い。こうなったことを記枝はよろこんでいるけれども、このさき彼の気持がどう動いていくのか見当はつかない。部屋を出ていくまでの彼の態度は記枝をしあわせにしている。しかしあれはああいうときの礼儀かもしれないし、そういうことに彼は慣れているのかもしれない。そう考えながらも後悔する気持はなかった。よかったという思いでいっぱいだった。彼にたくさんそういう女たちがいたとしてもそれでもかまわない。彼を好きなのだから、そのたくさんなの一人でもいい。好きでもない人間のたった一人の相手になるよりはよほどいい。

そういうことを思いながらいつかふかく眠っていた。電話の音で目がさめた。どこにいるのかしばらくわからなくて、電話機を見つけるのに時間がかかった。

「十時になります」

事務的な女の声だった。

彼女はあわてて着がえ、とび出した。顔も洗わず、歯もみがなかったが、わすれものがないようにベッドの上を整理して、下ものぞいて見た。

歩くのがいくらか不自由な気がした。しかしそれは記枝が昨夜のことを意識しているからだろう。出血はほんのわずかで、怪我をしたわけではないのだから。

歩きながら、これから彼と約束した時間までどうしようかと思った。いまから自分のアパートにもどってまた出なおしてくるとしても、部屋にいられるのはいくらかもない。だからといってどこかで時間をつぶすのには長すぎる。学校も学園祭の翌日で休みだし。駅のベンチで考えて、やはりシャワーをあびて服を着がえてこようと思った。そうすればちょうどいい時間にな